

氏 名	近 藤 一 郎 こん とう いち ろう
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	医 博 第 2 5 号
学位授与の日付	昭 和 34 年 3 月 31 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 1 項 該 当
研 究 科 ・ 専 攻	医 学 研 究 科 外 科 系 専 攻
学 位 論 文 題 目	所謂出血性メトロパチー患者の副腎皮質機能に関する研究 特に下垂体前葉一卵巣系との関連について
論文調査委員	(主 査) 教 授 三 林 隆 吉 教 授 鈴 江 懷 教 授 早 石 修

論 文 内 容 の 要 旨

われわれは、いわゆる出血性メトロパチーの本態を究明する目的で、本症の内分泌環境を総合的に検討しつつあるが、著者は、これを副腎皮質機能の面よりうかがうべく、本症患者尿中17-OHおよび17-K S排泄量の系統的測定を行なって、まづ、相当年齢の健康非妊婦のそれと対比し、ついで、従来、人のいわゆる出血性メトロパチーと相似た内分泌環境にあるとみなされている持続発情白鼠の副腎皮質を組織学的に検して、本症出血前の測定成績と対比し、さらに、本症患者に Gonadotropin あるいは性ステロイドを投与した際の尿中17-OHおよび17-K S排泄量の推移をしらべた。

まず、健康非妊婦の尿中17-OHでは、年齢あるいは性周期による差は認められず、一方、17-K Sには年齢による差が見られ、23才〜39才の婦人で最も高く、また、排卵期に増す傾向が認められた。

いわゆる出血性メトロパチー患者の出血前から出血中にかけての消長をみるに、出血前では、17-OHは一般に低値であるが出血開始時に一過性に増しており、17-K Sは出血前1週間頃に比較的高値であるが、以後漸減して出血時にいたっている。出血中では、17-OHおよび17-K Sとも、特に21才〜39才の婦人において、明らかに低下していた。本成績を同一対象について尿中 Gonadotropin および Östrogen 排泄量を測定せる共同研究者の成績と照合すれば、出血前の17-K Sの比較的高値および出血開始時の17-OHの増加は、それぞれ Gonadotropin, Östrogen のピークに追従するものごとくであり、また、出血前17-K S値の高い時期に17-OH値が対照的に低いのは、Tonutti のいわゆる Sekretionsumstellung なる現象を示すものであろう。

つぎに、持続発情白鼠の副腎皮質の組織学的検査では、傍髄質皮質層細胞の肥大増生ならびに束状帯細胞の肥大および脂肪顆粒の微細化、減少等が認められ、これらの所見は両細胞層の機能亢進を示すものであるが、前者の所見は本症出血前における17-K S高値の成績と一致するが、後者のそれは本症出血前における17-OH低値の成績とは矛盾している。

次に、本症患者に排卵誘発を目的としてわれわれ独自の方法で Gonadotropin を投与したところ、5例

中4例において排卵誘発に成功し、成功例においてのみ、ほぼこの時期に一致して17-K Sの増加がみられ、不成功例ではかかる変化はみられなかった。

さらに、性ステロイドを投与した際には、Progesteron 投与では投与後、一定期日を経て、17-OH、17-K Sとも一過性に増し、Östrogen 投与では投与中あるいは投与後に17-OHのみの増加をみ、さらにAndrogen 投与では17-K Sは投与により、もちろん、著増するが、17-OHは逆に減ずることを知った。

以上の成績を、同一の対象について共同研究者が下垂体前葉および卵巣機能を検索した成績とを対比検討した結果、著者は本症の下垂体前葉一卵巣系機能失調に、副腎皮質も関与しているものとの推論に到達した。

論文審査の結果の要旨

いわゆる出血性メトロパチーの成因ならびに出血発来機序に関しては共同研者東条、真鍋は同患者の尿中 Gonadotropin, Östrogen, Pregnandiol 排泄量の経日的測定成績、持続発情白鼠の下垂体前葉、卵巣所見等から下垂体性排卵障害がその一次的原因であり、存続卵胞からの Östrogen 過剰分泌、次いできたる存続卵胞の退行による Östrogen 分泌減少により出血するもの、いわゆる Östrogen 消退出血であると推論したが、近藤は同じ臨床材料について尿中 17-OH、17-K Sの経日的消長、諸種ステロイドホルモン単独投与時および妊馬血清性 Gonadotropin と絨毛性 Gonadotropin 併用時におけるその変動を観察し、これを東条、真鍋の同じ条件下における尿中 Gonadotropin, Östrogen, Pregnandiol 所見と対比検討し、さらに持続発情白鼠の副腎皮質の組織像をも詳細検索した結果、本症における下垂体前葉一卵巣系機能失調に副腎皮質も明らかに関与していることを指摘し、東条、真鍋との協力のもと本症の本態解明に貢献したのであり、医学博士の学位論文として価値あるものと認定した。

〔主論文公表誌〕

日本産科婦人科学会誌 第12巻（昭.35）第8号予定

〔参 考 論 文〕

1. 絨毛上皮腫の内分泌学的研究 特に Progesteron 投与の効果 （大橋敏郎ほか4名と共著）
公表誌 産婦人科の実際 第7巻（昭.33）第10号
2. 無排卵性周期における Gonadotropin 投与の効果 （大橋敏郎ほか3名と共著）
公表誌 産婦人科の世界 第11巻（昭.34）第3号
3. 分娩予定日超過 その統計的観察並びに尿中諸種ホルモン測定成績 （大橋敏郎ほか6名と共著）
公表誌 産科と婦人科 第26巻（昭.34）第10号
4. 不妊の内分泌学的研究 第1報 不妊婦人における尿中諸種ホルモン測定成績
（大橋敏郎ほか4名と共著）
公表誌 日独医報 第5巻（昭.35）近刊号予定
5. 外陰部悪性黒色腫の1例 （谷 明夫ほか4名と共著）
公表誌 産婦人科の進歩 第12巻（昭.35）第4号予定